

登場人物像の構築における読書量の影響

佐藤礼子

(お茶の水女子大学人間文化研究科)

【問題と目的】

物語の読み手は話全体を通して一貫した総合的な登場人物像を構成する。その登場人物像は、内面（性格）のみならず、視覚的側面（外見）や聴覚的側面（声）の特性なども備えた多面的なものである。そこで本研究では、外見・性格・声の3側面について、登場人物像の構成の仕方への読書量の影響を検討する。実験Ⅰでは外見の描写のない文章、実験Ⅱでは外見の描写のある文章を材料に用いる。

【実験Ⅰ】

《仮説》登場人物の外見の描写のない文章材料において、小説接触度高群の方が低群よりも詳しい登場人物像を構成する。

《方法》実験計画：1要因計画（小説接触度：高／低）である。被験者：女子大学生33名。小説接触度高群19名低群14名に分けた。材料文：椎名篤子『親になるほど難しいことはない』より一話分12ページ。課題：物語の中心的人物について外見・性格・声の側面ごとに出来るだけ詳しい自由記述。手続き：材料を各自の速度で読んでもらい回収した後上述の課題を実施した。

《結果》(図1)側面ごとに項目数を数え、それを12の下位カテゴリに分類してそのカテゴリ数を従属変数とした。分散分析の結果、外見のカテゴリ数において小説接触度の主効果が有意で ($F(1, 31) = 5.19, p < .05$) 小説接触度高群の方がカテゴリ数が多かった。

《考察》小説接触度の高い方が登場人物像を詳しく構成していたので仮説は支持された。詳しく構成された側面は外見であったことから、小説読書量の多い者は、文章に書かれていない側面を自ら詳しく補って登場人物像を構成すると考えられる。

【実験Ⅱ】

《仮説》登場人物の外見の描写のある文章材料において、小説接触度高群の方がより詳しい登場人物像を構成する。詳しく構成される側面は、文章では明示的でない性格か声の側面と予想される。

《方法》被験者：女子大学生54名。小説接触度高群27名、低群27名に分けた。材料文：実験Ⅰで用いた文章材料に、登場人物の外見の描写を加え

た。課題と手続きは実験Ⅰと同様である。

《結果》(1)量的分析(図2)：側面ごとの項目数を従属変数とした。分散分析の結果、小説接触度高群の方が低群より性格の側面の項目数が多い傾向があった ($F(1, 52) = 3.01, p < .10$)。

(2)質的分析：外見の描写の利用のされ方： χ^2 検定の結果、小説接触度の低いほうが文章中の描写を利用している者の割合が多い傾向が見られた ($\chi^2(1) = 2.73, p < .10$) (高群26%、低群46%)。

《考察》小説接触度の高い方が登場人物像を詳しく構成していたので仮説は支持された。詳しく構成された側面は性格であったことから、小説読書量の多い者は、文章に書かれていない側面を詳しく補って登場人物像を構成すると考えられる。ただし外見の描写の利用のされ方を検討したところ、文章中の描写にはあまり注意を払わず、むしろ自らの想像の方を重視する傾向がうかがわれた。

【総括的討論】

本研究では、構成される登場人物像を外見（視覚的側面）や声（聴覚的側面）を含め多面的に検討することにより、小説読書量の多い者には文章中に書かれていない側面を補うという特徴があることが示唆された。

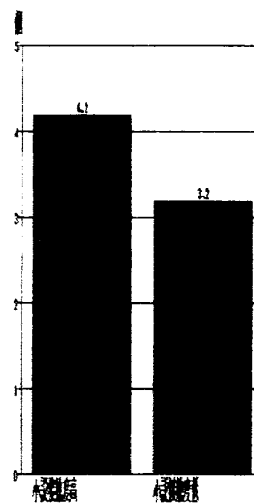


図1 各群の外見のカテゴリ数

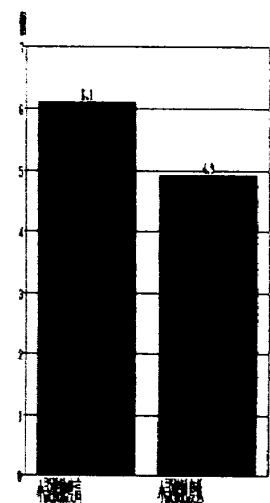


図2 各群の性格の項目数